

---

# 猫神社

\_瑠姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫神社

### 【著者名】

一瑠姫

N4088BA

### 【あらすじ】

主人公・葉月が住んでいるところにはある噂がある。  
噂、というかマジで出る話。それを確かめるため行動を起こすが…

## 第一話 猫道！？

「ニヤ～…」ジジ

あぐびをするような猫の鳴き声にびびり後ろを振り返るとさつぱり猫がいた。

猫もこぢりに氣づいたようで慌てて去ってゆく。

私の名前は大原葉月。

小学6年生の極々普通の女子である。

私がいまいる場所は家からちょっと離れたところにある道。  
お母さんからのおつかいの帰りだ。  
ネギがささったもう行き慣れたスーパーのレジ袋を右手に持ち  
もう通り慣れたはずのこの道を歩く。  
通りなれているはずなのに足は力ク力クと細かく震えている。  
寒さのせいだ、と無理矢理考え込み前を見た。

この道は私の通ってる小学校でも、近所でも有る。  
けいへんの人なら知らない人はいないだろう。

「猫道」と呼ばれている道。

名前は極々普通でよそからきた人でわかるくらい単純。

「猫がいっぱいいる道」で猫道。

単純すぎて笑える。

しかしこのへんの爺や婆は笑わなかつた。

それどころか大人はみんなこの道を避けた。

猫がいるだけなのに、どうして？

皆、そう思つことだらう。

それは、ここの道は出るから。

これは本<sup>マジ</sup>氣だ。

それも品のない怪談話や自殺した女が出るとかじゃない。

猫が出来るのだ。

……わかるだらうか？

説明するのが難しいのだが、しつぽが一つある猫が出るらしい。

見たことは……

あれは2年前。

見てしまったのだ。

この道を歩いていたとき。

そのときはまだその尻尾しっぽが一つの猫の話を信じてはいなかつた。

しかし、いつもおつかいの帰り道に

普通の猫より低い声の鳴き声がしたと思い振向いたら

いた。

ずつしりと重そうな体つきにオヤジのようなポーズ。  
そしてなにより人間臭いあの低い声。

もう一目散に帰つて近所の人とか家族に話した。

みんな驚いたりお経的なものを唱えたり…

ウチの婆様に限つてはぶつ倒れた。

そんなヤバいものなのかと近所の子供たちは皆震え上がり…

もつこの道を通る者は少ない。

まあ、私はこの道を通つてゐるのだが。

恐怖は感じるものでなければ帰れない。

そんなとき、ある奴に声をかけられた。

## 第一話 キムチ鍋

「オイ、なにせつてんの？」

心臓が凍りついた。

うふ。むう凍りつめたうととかのレベルじゃない。

わっくつと振り返る。

引きつる私の笑顔。

「あは…相沢…」

相沢とは私の家のとなりに住んでくる者。

私より20年上だ。

なぜか苗字で呼び合つてゐる…。

「いまだや二三の道通りのむかへ前へりこだわ…」

ナウボソッと歎きレジ袋の中身を覗く。

「んん…ネギに豆腐…えのき…」

ブツブツと中身を言つてゆく相沢。眉間にシワが、険しい顔。

「キタツ…キムチのもと…」

「は?」

確かにキムチのもとは入つてるけど…なにか?

いきなり叫んでガツツポーズしている相沢に戸惑いを隠せない私は  
「お前んち今日の夕飯キムチ鍋か!…!…食いに行くからおばさん  
に言つといで…!」

「は…!…!…?」

さつきより大きな声で問う。

しかし自由奔放な彼が聞くはずも答えるはずもなく…

キムチ鍋がすきなの?変わってるな…

なんて考えながら前を見たらもう相沢はいなかつた。

かなり前を全速力でスキップ調に走っている。

そうそう、猫道は真っ直ぐな一本道で100メートル先ぐらいは見える。

「//ヤ～オ…」

可愛くて小さい猫が足元に擦り寄ってきたのでそつと引き剥がしす

親と思われる茂みの中にいる猫の近くに置いた。

『一いつただつ れせあ あす！…！…！』

私のお父さん、お母さん。

そして相沢。

まあ相沢は明るいひびに食べに来るので報告してきたからよこけ  
べ。

相沢のお母さん、そしてお父さんも一緒にいた。

笑顔で一番先に鍋へ箸を伸ばしたのは相沢のお母さん。

「わいしわあ わすが奥さん！…！」

「あらあ～鍋は得意なよ～！…！」

わつわまど何で「イイヅラもいるんだよ」的な顔をしてたお母さんも

相沢のお母さんの言葉で上機嫌。

つかんちの「」飯たべる相沢も

それにつってきた父親も

笑顔で一番先に食べ始める母親も

ソイシの煽てですぐ上機嫌になるお母さんも

それになにもいわないとお父さんも

おかしい～～～！～～～！

「うわわわわわわわ…」

何かに負けた気がして食が進まず、一番先に茶碗を下げた。

「あらあ、もう終わり？葉月ちゃん？もうと食べないとお～

お母さんとしゃべっていた相沢のお母さんがこう。

お前んちじやねーよ…と心の中でシシコリを入れ自分の部屋に戻つた。

そしてすぐベッドに飛び込み身を沈めた。

遠くに聞こえてくるあの人たちの笑い声。

妙に疲れるんだよね……相沢のお母さんといふと……

「パソコン

「ふえ～い」

突然なつたノックに驚きながらも返事をする。

「葉月？どうしたの？」

クッショーンをかかえ起き上がる私。

入ってきたのは相沢だった。

「別に……」飯は？

「食べ終わつた。葉月、怒つてんの？」

「別に……！」

強がつてみたりする。

「どうか怒つてる？」と聞かれはい、怒つてますという人がどこにいるの？

「ああ～もうじょうがないなあ、相沢お兄様が面白い話してやる  
うーー！」

ぶすっと軽く相沢を睨んだが彼はもつ話す気満々だった。

「猫道があるだろーーー？」

「…………うん……」

話せとも言つてないのにじょつがないなあ、とかい「う態度で話し始める相沢。

ムカつくなあ…

「まーつすぐだけど突き当たりがあるだろーーー？」

あるだろーーー？が多くなーー？」「イツ…

「その突き当たりに小さい神社的なトコがあんだろーーー？」

乱暴になつてきてるや…

というかその神社つて神社とはいなーくらー小さい祠じやん。

しかし相沢は怪訝そうな顔をする私を置いて一人で夢の世界へと旅立つていった。

よつにキラキラと瞳を輝かせている。

そして息をすうっと吸った。

「いや 大声で最後のシメを言ひ気だな…

耳をふさぐ。

「その神社にお供え物をして願い事すると願いが叶うんだってー  
ーッッ！ー！」

予想以上の大声を出す相沢。

瞬間「うるさい……」と相沢のお母さんから怒り声が聞こえた。  
キャピキャピとクラスの女子のよつて生き生きと喋る相沢。

「くだんな……」

「マジだつて……俺、叶つたんだつてばー」

「ーーー？」

クッションを放り投げる。

「マジでーーー？なに願つたのーーー？」

「えへへ…絶対嘘だと思ってて…ケーキが食べたいって願つたんだ。そしたら…」

「…その日のおやつがケーキだったワケね。はいはい」

舌を出して喋る粗沢はちょっとだけ子供に見えた。

でも…神社…気になる

相沢のは偶然だろうけど

もしかしたら叶うのかも?

女子はやつぽつこいつの尊が気になるみたいに出来るんだよ。

私はばつちり脳みそ内にそれを記録して相沢を追い出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4088ba/>

---

猫神社

2012年1月10日21時47分発行